

第5回日向東臼杵広域連合次期広域最終処分場建設検討委員会
会議録

日 時	令和6年7月1日（月）午後2時30分 ～ 午後4時00分
場 所	西郷ニューホープセンター(美郷町)
参加者	23名（傍聴者1名）
出席者	委員 学識経験者 土手裕委員（長）、大榮薫委員 環境団体 山田大志委員 住民代表 後藤充委員、道口光一委員 連合長が必要と認める者 小野圭一委員、松本恵喜委員 小野和久委員
	事務局 日向市 奥原課長補佐 門川町 小林環境水道課長 美郷町 黒田町民生活課長、中田主幹 諸塚村 中原住民生活課長 椎葉村 椎葉主幹 広域連合事務局 黒木事務局長、吉玉係長、日高係長、 近藤主任主事、黒木主任技師
	コンサル 株式会社建設技術研究所 平川主幹、長谷川技師長、神谷技師
欠席者	原田隆典委員、佐伯雄一委員、末次大輔委員
次 第	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委嘱状交付 3 あいさつ 4 協議（議事進行：委員長） <ol style="list-style-type: none"> （1）前回委員会の確認 （2）地質調査計画について （3）オープン型最終処分場と被覆型最終処分場の比較検討について （4）今後のスケジュールについて （5）その他 5 閉会 <p><配付資料>（全公開資料）</p> <p>【資料1】第4回建設検討委員会議事要旨</p> <p>【資料2】地質調査計画</p> <p>【資料3】オープン型最終処分場と被覆型最終処分場の比較検討</p> <p>【資料4】今後のスケジュール</p>

会議内容

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 あいさつ（委員長）
- 4 協議（議事進行：委員長）

議事（１） 前回委員会の確認

- 【委員長】** 協議（１）について、事務局より説明を。
（資料１について説明）
今回は3月8日（金）14時30分より西郷ニューホープセンターで開催された。内容の説明については、時間の関係上割愛させていただくが、お時間のあるときにご一読いただきたい。
- 【委員長】** 一度、確認している資料なのであとで読んでいただければと思う。
それでは、次の協議に移る。

議事（２） 地質調査計画について

- 【委員長】** 協議（２）について、事務局より説明を。
- 【事務局】** （資料２について説明。）
資料２については、今回の受託業者である株式会社建設技術研究所より詳細な説明をしていただく。
地質調査については、次期広域最終処分場建設候補地の地盤情報を得ることで基本設計、詳細設計に反映させることが目的である。昨年度、予備調査で3箇所ボーリング調査を実施し概略的な地層の把握をした。地層の古いほうから、5、6千万年前の四万十累層群日向田代層の非常に硬い基盤岩があり、その上が阿蘇山の噴火による阿蘇4火砕流堆積物で覆われている。この基盤岩と火砕流堆積物との関係が非常に重要であり、この関係を見極めるのが次の段階の地質調査であると考えている。調査については、ボーリング調査を2段階に分けて実施する。第一段階では、地下水位構造を把握するため、時間をかけて8月から9月の間で行う。その結果を踏まえて、地質解析を行い、第2段階のボーリング調査（表3）を11月から12月までに実施する。
資料２についての説明は以上である。
- 【委員長】** 事務局から説明があったが、質問等はあるか。

- 【委員】 この着色された図面は、学術的な宮崎の土壌分布図の資料なのか。
- 【事務局】 宮崎県の『土地分類基本調査表層地質図』を参考になっている。
(5 ページ右上に記載)
- 【委員長】 よろしいか。ほかに質問等はあるか。
- 【委員】 地質調査を実施する土地の地権者の承諾はとれているのか。
また、ボーリング調査で想定外の地下水が出た場合はどうするのか。工事の際、基礎を深く掘って処理出来るようにするのか。
- 【事務局】 ボーリング調査については、地形を考えても水が吹き上がることはないと思っている。ただ、処分場を造るときに地下水位が影響する場合は水の処理が必要になるため、地下水の状況を見極めなければいけないと考えている。
- 【委員長】 地権者の承諾について、回答をお願いしたい。
- 【事務局】 基本同意が調査を行う際の同意ということで、地権者に対しても説明を行い同意を得ている。
- 【委員長】 よろしいか。ほかに質問等はあるか。
- 【委員】 確認だが、資料2の図の4と図の5は同じものなのかが1点。
2点目に、この配置図は、被覆型最終処分場、オープン型最終処分場のどちらかを仮に想定していると思われるが、どちらを参考にしているのか。
- 【事務局】 まず、1点目の図面については、大きさは違うが同じ図である。
もう1つの質問については、被覆型としている。
- 【委員】 被覆型に決定はしていないが、被覆型にした根拠を教えてください。
- 【事務局】 いまは仮に被覆型とした。補足なるが、オープン型と被覆型は確定していないが、どちらでも大丈夫なようにということで調査をさせていただいている。オープン型、被覆型になるかで若干調査地点は変わってくると思うが、オープン型、被覆型のどちらになるかを比較して、第2段階での調査計画については、それが確定したあとに調査計画の位置の見直しを考えている。
- 【委員長】 いまは仮のかたちということでよろしいか。ほかに質問等はあるか。
- 【委員】 5 ページの3の課題の②『阿蘇火砕流堆積物の岩盤性状によって透水性・強度が異なる。』と記載があるが、7 ページのマップの地質の強度はどうなっているのか。
- 【事務局】 7 ページの地質平面図ではまだそこまでの区分をしていない。硬さと割れ目の多さ、透水性の異なる細かい部分や位置関係については、これからしっかり設計したい。
- 【委員】 結果がわかった段階で知らせてほしい。
- 【委員長】 よろしいか。ほかに質問等はあるか。
それでは、次の協議に移る。

議事（3）オープン型最終処分場と被覆型最終処分場の比較検討について

【委員長】 協議（3）について、事務局より説明を。

【事務局】 （資料3について説明。）

オープン型最終処分場と被覆型最終処分場の比較検討ということで、現時点で調査した結果を踏まえて整理したのでその報告をさせていただきます。

まず、オープン型最終処分場と被覆型最終処分場の形式についてどのような種類があるか説明させていただきます。オープン型最終処分場で、画面（プロジェクタースクリーン）に表示させていただいているのが現在、埋立が行われている日向市の一般廃棄物最終処分場の埋立が始まる前の完成写真（8ページ右上）で、黒い部分は遮水工で被覆されており、最終処分場は基本的に沢部や閉所に造られる。雨に対しては影響を受ける構造となっている。埋立地内で降った雨は埋立地の中を通過して、浸出水集排水施設で集められ、浸出水の貯留槽に溜めて処理施設で処理したあと、公共用の河川や下水道に放流する。大規模処分場に適しており、地形に合わせて用地を最大限に利用することができる。埋立計画は15年であるが、将来の埋立容量の変動に対応が可能であり、具体的にいうと上流側にポケットが残っていれば拡張ができる。被覆型に比べると維持管理が容易であり、一般的には被覆型最終処分と比べて建設コストが低い。降雨に対する気象の条件を受けやすいのがデメリットである。

続いて、都城市の被覆型最終処分場の写真（8ページ右下）が屋根付きの処分場で、降雨に対する影響を受けにくい。埋立地内は散水等を行うことで安定化を図っていく構造である。散水を行うことによって、散水の量で浸出水の発生量をコントロール出来る。その分、少ない処理施設の能力で済むことになる。被覆型最終処分場は平成10年から長野県や新潟県で採用されて以降、現在までに90件ほど建設されている。処分場としては、気象の条件を受けにくく、外から見ると屋根があるため、クリーンなイメージがある施設として地域社会に受け入れられやすい。散水設備などの維持管理が複雑となり、屋根の設置や最終的にはその屋根を撤去必要もあることから、一般的にはオープン型最終処分場と比べて建設コストが高くなる。

次に、それぞれの処分場の維持管理や生活環境の影響について説明させていただきます。埋立作業、浸出水処理、埋立地の安定化、生活環境への影響を表（9ページ表1）に整理している。

まず、オープン型最終処分場の埋立作業については、覆土を行うが、強風時には廃棄物等の飛散防止のため、埋立作業を中止することがある。一方、被覆型処分場は強風に左右はされないが、換気などの対策が必要である。

続いて浸出水処理について、オープン型最終処分場の場合は屋根がないた

め、気候変動を十分に考慮した浸出水処理施設計画や運転管理が必要となる。また、浸出水が被覆型よりも多いため、建設費も増大し、熟練した浸出水処理施設運転が必要である。それに対して、被覆型最終処分場については、降雨の気象条件に左右されない。散水によってコントロールすることになる。維持管理自体は複雑であるが、運転管理についてはオープン最終処分場に比べて容易となる。

続いて、埋立地の安定化については、オープン型最終処分場は基本的には自然に安定化させるため、安定化までの期間が予測できないデメリットがある。そのため、近年、埋立地のキャッピングという方法によって雨水のコントロールも行われている。一方、被覆型最終処分場については、有効的に散水を行って、効率的でコントロールされた安定化促進を行う。これにより、安定化期間の短縮ができ、維持管理費のコストの削減ができる。

生活環境への影響については、オープン型最終処分場は閉鎖空間ではないため、生活環境影響に十分配慮する必要がある。基本的には覆土や散水によって飛散、悪臭、外注・獣の発生を抑制することになる。一方、被覆型最終処分場は閉鎖空間であるため、外部の生活環境への影響をオープン型最終処分に比べて大幅に軽減できる。以上のことから、維持管理や埋立作業の内部作業環境については劣るものの、全般的には被覆型最終処分場のほうが優位性があるという結果となった。

経済性 (2.2) については、降水量が影響する。そのため、令和5年度に建設候補地において気象調査を実施し、建設候補地の降水量が日向田代観測所(近隣の観測所)と比較して多いことがわかった。その結果を踏まえて、浸出水の処理施設の規模を整理している。オープン型最終処分場については、前年度までは浸出水処理施設の能力が1日あたり200 m³で浸出水貯留施設が9,700 m³という結果であった。これは、日向田代観測所のデータを使って計算したものであるが、今回の新しいデータを踏まえて計算した結果、浸出水処理施設の能力を同規模にした場合、浸出水貯留施設が12,400 m³。浸出水貯留施設をほぼ同規模にした場合は、浸出水処理施設は1日あたり350 m³処理の能力が必要であるという結果となった。

浸出水処理施設建設工事費 (2.2.2) について、基本的には『環境安全な廃棄物埋立処分場の建設と管理』を参考文献として施設の概算費を算出することが一般的であった。それをもとに算出したオープン型最終処分場の場合、浸出水処理施設の能力が1日あたり200 m³で約11億円。被覆型最終処分場の浸出水処理施設の能力が1日あたり25 m³で約4億円となった。この25 m³の根拠については、液固比1~3というものがあり、この3という数値を用いて廃棄物量40,800 m³に対する処理能力を設定し、25 m³としている。(10

ページ表4の※1、2より) 算定結果による費用はこの成果であるが、近年急激なインフレが生じている。それはこの算定には考慮されていないため、浸出水処理施設の建設業者に対して見積依頼をして工事費を把握した。その結果、さきほどの約11億円に対して約24億円。約4億円に対して約13億円という見積結果となった。

以上を踏まえて、気象調査結果(2.2.3)を考慮した概算工事費及び維持管理費を計算した結果を整理した(表4)。工事費については、埋立地工事費がオープン型最終処分場で約18億円。被覆型最終処分場で約29億円。浸出水処理施設工事費はさきほどの説明のとおりで、工事費の合計はそれぞれ約42.7億円と約42.5億円でほぼ同等となった。一方、維持管理費について、埋立管理等、浸出水処理管理、環境管理を整理をした。1年ごとの費用を算出し、埋立期間から廃止までの期間を踏まえて試算をしている。廃止というのは、※4に記載しているとおり、法的に維持管理が不要となる状態のこと。オープン型最終処分場の埋立終了から廃止については15年の期間と想定している。15年という年数の根拠はどこにも記載はないが、専門家の中で15年が相当であるというふうに言われている。被覆型最終処分場は2年で設定しているが、散水によって埋立が終わる頃には、埋立地から出てくる浸出水はほぼ処理が必要ないということを想定して散水を行っていくという計画をするため、廃止基準の中に2年は維持管理をしておくようにという記載があるため、その2年を採用している。オープン型最終処分場については、埋立期間15年プラス埋立終了から廃止まで15年の30年。被覆型最終処分場については、15年プラス2年で17年と想定して環境管理についても計算している。維持管理費はオープン型最終処分場で約35億円、被覆型最終処分場で約18億円と倍ほどの差となった。被覆型最終処分場は屋根の撤去で約1億2千万円が必要となるが、維持管理費の差があるため、合計額はオープン型最終処分場で約78億円、被覆型最終処分場で約61億円となり、被覆型最終処分場のほうが経済性からも優位であるという結果となった。

次に社会的な受容性について(2.3)、周辺地区等への説明会でお聞きした内容を記載している。ひとつは、花水流地区、耳川水系内水面漁業協同組合から被覆型最終処分場を希望する意見があった。また、仮迫地区の説明会の中で粉じんや悪臭の影響を懸念する意見があった。これについては、被覆型最終処分場を採用することで懸念を払拭されると考えられる。

続いて、気候変動による浸出水処理のリスク(2.4)について、九州南部・奄美地方の1時間50mm以上の降水量について整理している。その割合が、過去40年で1.6倍に上昇している。宮崎県の平均気温についても、100年で1.2℃上昇ということで、今後も大雨の増加が懸念される。また、日向田代の

年間降水量についても計算した結果、同じく増加傾向となった。仮に、オープン型最終処分場で計画する場合は、浸出水の処理施設と貯留施設容量で、降水量が増えると埋立地内で貯留することとなり、水質悪化を招くことで浸出水処理の運転管理が難しくなるということも考えられる。それに対して、被覆型は屋根があるため、気象に影響されにくいことに加えて、浸出水の水質もコントロールが可能である。そのため、浸出水処理の運転管理については被覆型最終処分場のほうが容易である。

以上の成果を踏まえて、4つの視点から比較をした結果、オープン型最終処分場より被覆型最終処分場のほうが優位性があるということを確認された。結論ではないが、被覆型最終処分場のほうが望ましいのではないかと、今回の検討結果である。

資料3の説明は以上。

【委員長】 それでは、かなり量があったが、質問等があればお願いしたい。

【委員】 いま説明を受けたオープン型、被覆型について、見直し、試算の方法、あるかと思うが、地元のほうとしても公害関係を考えるとやはり被覆型のほうが望ましいのではないかと。わたし個人としましても望ましいのではないかと思う。

また、見積もりの10ページの表4で屋根の撤去費が1.2億円とあるが、連合の構成団体で負担金を出すことになるわけなので、もし被覆型にするのであれば、これを有効に改良出来るように、いまのうちからクリーン、エコを目的としたものを何か検討したほうが良いと思うので、一つ提案させていただく。

【委員長】 いまの話は撤去したものをなるべく有効活用するということか。

【委員】 撤去せずに。

【委員長】 撤去せずに屋根は付けたままということであるが何かあるか。

【事務局】 被覆型最終処分場に関しては、跡地利用として被覆型をそのまま残して、活動施設などに再生利用することもあると思う。屋根の耐久年数等もあるが、可能であれば中（屋内）は使えるとは思っている。ただ、埋立ガス等も出てくる可能性があるため、今後、内部環境的にも問題がないかどうか踏まえて検討を進めていければと考えている。

【委員長】 よろしいか。ほかに質問等あるか。

【委員】 わたしも昨年、都城の施設を見学に行ったが、オープン型は粉じんが風で舞っているような気がしたので、わたしも被覆型のほうが良いと思う。被覆型の建設費は高いと思っていたが、低くなったので、これは今後資材の高騰などあると思うがそれを備えての価格で61億円なのか。

それと被覆型の浸出水処理能力の25 m³は最大を採用しても大丈夫なのか。

あと、屋根の撤去費、ガスによる腐敗とサビによって割れる可能性があるから撤去すると思うが、撤去したあとは締固めて整地するのか。

【委員長】 質問は三点でよかったか。まず、見積について。

【事務局】 見積については、あくまで令和6年5月時点であるため、今後の物価上昇のことまでは見込んでいない。材料費については、土木系資材ということで、あまり物価の変動はないと考えている。

2点目の屋根の耐久性について、腐食性があるガスは一般廃棄物処分場の中では少ないと思う。ただ、そういったものを検討し、耐久性についてもすぐれている材料で設計は進めていきたい。3点目の質問をもう一度いいか。

【委員長】 浸出水処理施設の25 m³について。

【事務局】 液固比1.5から3の中で、最大の3を採用しているので、今後の検討によっては変わるところではあるが、現段階では最大値として考えている。

【委員長】 よろしいか。ほかに質問等あるか。

【委員】 わたしも都城の施設を見学した際、被覆型は非常に高額なイメージであった。しかし、今回、概算の見積をみたときにかなり経済的で、住民の方も生活環境を一番心配していると思うので住民の方にとっても被覆型が望ましいのではないかとわたしも感じた。さきほど、いまの時点から今後の活動(跡地利用)について考えていたほうがいいのではないかとこの意見があったが、わたしの記憶では、都城が被覆型をテニス場として使用していると聞いた。被覆型は平成に入ってから建設が進んでいるということで、例は少ないのかもしれないが、事例等を住民の方に示してもらえると、いろいろな考えの参考になると思うので、よろしくお願ひしたい。

【委員長】 跡地利用の方法を示してほしいとの意見ということでよろしいか。他に質問等あるか。

【委員】 質問ではないが、せっかくここに来ているので一言は意見を言わなければと思い、あえて言わせてもらう。2022年12月21日にもらった資料では、被覆型が49億円、オープン型が48億円という積算をいただいている。そのときは、オープン型と被覆型どちらがいいのか全然分からなかった。今回の資料を見ると、被覆型しかないと思う。逆に言えば被覆型ありきでこの資料が出来ているということもあり得るが、わたしは被覆型が一番いいといつも思っていた。第一にこういった最終処分場事業というのは、環境を侵すことはできないと考えたときに被覆型がいい。ただ、費用がどうなるのだろうかと思っていた。被覆型は最初に費用は発生するが、オープン型も途中で気候変動リスクによって思わぬ費用が発生するということもあると思うので、そういうことを考えても最初に費用が見越せたものの方がいいということであれば被覆型がいい。また、コントロールできる状況というのも被覆型がいい。

最近、特に現場でいろいろな事故が起こったときに、想定外ということをよく聞くが、もう、いまは想定外という言葉は使えないと思う。想定外の想定をしておく事業が必要だとわたしは思う。お互いに意見を言い合いながら被覆型を進めていければ、より目的にあった最終処分場になっていくのではないかと考えている。以上。

【委員長】 ほかに質問等あるか。

【委員】 表の1の浸出水処理のところの、下から2行目のあたり浸出水処理施設の建設費に関してのコストについて記載があるが、被覆型最終処分場のほうが、建設維持管理費ではなく建設費が安くなるというのは、どう理解すればいいのか。

【事務局】 建設費が安くなる方向になるという意味合いである。

【委員】 処理容積が小さくなることで建設費が抑えられるというふうにわたしはこの文面で解釈したのだが。

【事務局】 表4にあるように、基本的には現段階で建設費はほぼ同等である。浸出水の変動の面で、2.4の『気候変動による浸出水処理のリスク』を踏まえて記載したかたちで、浸出水処理施設の建設費の差が大きくなるという意味合いで記載させていただいている。

【委員】 申し訳ないが、理解出来なかった。

【事務局】 水処理施設だけの比較なので、水処理施設からみると表4のほうが24億円と13億円であるため、オープン型に比べて浸出水処理施設の建設費が安価ということである。埋立地の工事費でなく浸出水処理施設の建設費の比較を記載している。

【委員】 一日の処理容積の差から施設の規模が変わってくるということか。

【事務局】 水処理の維持管理のコストについても、水量が少なくなるため、その分、被覆型最終処分場のほうが安くなるということである。

【委員】 承知した。

あと、10ページの注2)の3行目に被覆型最終処分場は地盤の強度がないと建設工事費が高騰することがあるとの記載があるが、地盤の強度と被覆型の建設の規模に向いているのか強度を高めるような工程を踏めば建設可能なのかについて、今後、ボーリング調査をして見極めていくと理解してよろしいか。

【事務局】 被覆型については屋根があり、柔らかい地層があれば固い地盤まで基礎杭を打つ必要がある。まだ調査結果が出ていないため、必要に応じてはいま想定している杭の長さが長くなって高騰するという意味合いで記載させていただいている。

【委員】 表4に示されている以外にかかる費用を含めて、今後、示していただきたい。

【事務局】 承知した。調査結果で、どのくらいの杭が必要かも踏まえて建設費については見直しをかけていきたいと思う。

【委員】 いまの時点で確認させていただきたい。資料10ページの2.5で総合的な評価で『建設候補地における最終処分場の施設形式は被覆型最終処分場が望ましい』と記載されている。最終的にどちらかに決定をする時期は、我々建設検討委員会が検討した結果を上の方に提言をして、これが地域協議会、地元住民説明会、広域連合議会を経て決定されるイメージであるがそのあたりが決定されているのであれば教えてもらいたい。それから決定の工期について、費用、安全面、公害防止、社会での受け入れの状態を考慮して最終決定を予定しているのか。いまの時期でわかっていることがあれば教えてもらいたい。

【委員長】 事務局からスケジュールというかプロセスの説明をお願いしたい。

【事務局】 今後のスケジュールについては、本日の建設検討委員会の皆様のご意見を反映させて、地元の方にも同じような説明をする。その後、構成市町村でまた協議し、最終的には構成市町村の首長5名、連合長、副連合長の会議で決定し、それを基本計画の中でどちらかの型式で示すことになる。その基本計画を今年度中に作成し、その基本計画を連合議会で報告する流れになる。以上。

【委員長】 今回の委員会の中での意見や協議した結果を踏まえつつということで、そのあたりは最後のスケジュールでもまた話があると思う。

よろしいか。他に質問等ないか。

わたしのほうから、維持管理のところ心配な点があって、ごみを埋めるのをやめてから廃止する期間を見積もるのはすごく難しいと思うが、被覆型最終処分場も閉鎖しているところがそろそろ出てきていると思う。どのくらいかけて閉鎖されるか、という情報やデータを集めていただき、それを運転費の計算に反映するかたちでお願いしたい。確かにモニタリング期間は2年であるが2年で終わるかという気がする。実績として、埋立の技術も当初の頃、平成の頃から変わってきているとは思いますが、その辺りも含めて被覆型最終処分場は閉鎖、廃止までどれくらいかかるのかということ調べて、次の委員会で教えていただきたい。

【事務局】 承知した。

【委員長】 他に質問等はないか。よろしいか。この委員会としては、被覆型最終処分場でいいというような合意ということになるかと思う。

それでは、次の協議に移る。

議事（４）今後のスケジュールについて

【委員長】 （４）の今後のスケジュールについて事務局より説明を。
（資料４について説明。）

【事務局】 あくまで現時点での予定であるため、今後の状況次第では変更の可能性はある。表１の令和６年７月に検討委員会が行われている。この後に花水流区地域協議会で今回の検討委員会の結果の報告をさせていただき、地域振興策と公害防止協定の協議を進めていければと考えている。ボーリング調査開始予定ということで、先ほども説明があった地質調査についても暑さ等を考慮しながら８月から進めていく。それから、９月に同じく花水流区地域協議会を開催予定。こちらについては、継続案件というかたちで進めていくことになるのではないかと思う。１１月に次回の第６回検討委員会を実施予定。内容については、生活環境影響調査の計画と先ほど局長より話があったが、今年度で作成する基本計画の中間報告を行う予定である。同じ月に花水流区地域協議会で検討委員会の報告を行い、１１月までにオープン型、被覆型の型式の方針については決定する。令和７年３月に最終的な基本計画及び地質調査結果の報告を行い、令和７年１月から４月と幅を持たせているが、生活環境影響調査を開始する予定である。今後のスケジュールについては以上。

【委員長】 スケジュールについてなにかご質問、ご意見等あるか。
次の協議に移る。

議事（５）その他

【委員長】 協議（５）その他ということで事務局のほうからなにかあるか。

【事務局】 事務局から１点、冒頭でも話したとおり、今回の建設検討委員会はすべて公開で行っている。そのため、記者会見等の発表は実施しない。会議録を作成し、委員の皆様を確認いただいた後、資料と併せて公開する。以上。

【委員長】 委員の皆様からその他でなにかあるか。

【委員】 本日の会議の案内があった際に連合長さんが変わっているということで、広域で取り組む大きな事業なので、連合長さんがどのような私見、意見、意識を持っているのか気になる。是非、連合長さんの話を聞く機会があればと思うが、わざわざ出てこられることはないのかもしれないので、事務局から報告いただくとありがたい。検討をお願いしたい。

【委員長】 意見考え方等をよろしいか。

【事務局】 連合長が新しく４月に変わったが、すぐに広域連合のほうで、事業説明会を行った。そのときは、こちらからの一方的な説明で連合長の意見を聞く場はなかったが、近いうちに現地と一緒に行って説明する場を設けることも考えているので、連合長の意見等を聞きながら地元のほうにも伝えられればと思っている。

【委員長】 よろしいか。ほか質問等ないか。
以上で本日の協議を終了させていただく。それでは、進行を事務局へお返しする。

【事務局】 委員長、どうもご進行ありがとうございました。なお、会終了後、今後開催予定となっています地域協議会の件でお伝えしたいことがありますので、地域協議会に関係する方々はこの場にお残りください。委員の皆様、本日は長時間のご協議、本当にありがとうございました。以上で第5回次期広域最終処分場建設検討委員会を閉会いたします。お疲れ様でした。

(閉 会)